

地域史(誌)と地名

堂 前 亮 平

1 はじめに

近年、地名への関心が学問的にも、一般社会のなかでも、とみに高まってきている。これにはいくつかの理由が考えられる。すなわち、①昭和38年に成立をみた「住居表示に関する法律」によって、地名の合理化が促進され、従来慣れ親しんできた地名や由緒ある歴史的地名が消滅の危機に直面してきたこと②戦後、日本各地の都市化に伴って、従来村落や農地につけられていた地名が消滅したり、改変されてきたこと、また③農村地域においては農地の基盤整備によって、農地につけられていた小地名が地形の改変に伴って、消滅してきたことなど、社会的環境の変化に伴う地名の消滅や改変への危惧が一般の人々にも関心を引き起こしたもののといえよう。これらの社会的背景を通して、学問的にも地理学・歴史学・言語学・民俗学など個々の分野からの研究のみならず、これらの分野を総合した学際的研究も盛んにおこなわれるようになってきた。

地名は特定の場所を他の場所から区別し識別するために、地表空間につけられた名である。地名には広い範囲の場所につけられた地名、小さな地点につけられた地名、古い地名、新しい地名など、地表には無数といってよい地名がつけられている。また、地名の起源も種々あるが、山口恵一郎の分類によると①自然環境を端的に表現するか、または広くこれに因るもの、②土地制度や税制、または軍事・政治などに関連して与えられた法制的・政治的な意味をもつもの、③狩猟・漁撈・農耕、または交換経済・共同生活など、生産・流通に関連して発生した社会経済史的意味をもつもの、④信仰・民俗・口碑・伝承・衣食住など生活に関連して発生したものなど4つに分類している。地名の起源がいづれであっても、地名は土地と人々の生活との関わりから生まれたものであり、地名はまさに各々の土地の「生活史」を物語っているといえよう。

2 地域史(誌)づくりにおける地名調査の意義

近年、沖縄において地域史(誌)づくり、すなわち市・町・村・字史(誌)の編集がさかんにおこなわれている。地域史(誌)の編集は、地域住民に最も身近な生活史の記録を綴ったものであるといえよう。地域史(誌)の編集において、とりあげるべき分野は多岐にわたるが、地名もそのなかで重要なものの一つであると筆者は考えるが、従来、地名を地域史(誌)のなかで位置づけて編集された地域史(誌)の出版物は非常に少ない。

市町村字レベルの地域史(誌)でとりあげる地名は、市町村名のように広い範囲を示す地名から、字名や原名、さらに海域にある岩、畑のなかにある窪みなどにつけられている小さな地名に至るまで、非常に多く存在する。しかし、本稿で特に強調し取りあげたいのは小さな地名

すなわち小地名についてである。

小地名は地域住民の最も身近な地名であるが、各々の小地名と関わっている地域の人々は限られている。それだけに、消滅の速度も早い。とくに復帰後、農村地域における耕地の基盤整備事業が進められて、従来の地形が改変され、各々の地形につけられていた小地名が消滅しているし、小地名は陸地だけでなく海域にも存在するが、海岸部の埋立によっても小地名が消滅している。さらに深刻なのは、産業構造の変化に伴なって、従来山仕事や漁業にたずさわってそれぞれの仕事を通じて山や海域の小地名と関わってきた人々が非常に少なくなり、しかも高齢化をたどっているという現実、遠からず小地名が忘れ去られようとしていることを示唆している。このような背景のなかで、祖先から受けついできた地名を記録し、後世に伝えていくことは地域住民の責務であると考ええる。

また、学問的視点からみた場合、沖縄における地名研究は、戦前において東恩納寛惇・伊波普猷・鏡味完二らによって、戦後は仲松弥秀をはじめ若干の研究者によって研究が進められてきているが、本格的な地名研究は緒についたばかりといえる。このような地名研究の場合、基本的には小地名の記録から出発すべきであろう。地名の語源研究・分布論・民俗学的研究など地名研究も多く視点があるが、これらの研究が促進されれば地域史（誌）に還元され、より内容を高めることになる。

3 地名調査の方法

地名を地域史（誌）のなかに記録するにあたって、どのように調査し記録するかが課題となるが、これらに関して若干の私見を述べたい。

地名調査は ① 地名の分布、② 当地での呼称、③ 地名の語源、④ 地名がつけられた年代、⑤ 特定地名について、とくに使用している人達の職業・年齢などが考えられるが、基本的なことは①②③である。

地名調査にあたっては、まず、インフォーマントの選定がある。地名に限らずさまざまな聞き取り調査にも共通することであるが、調査はインフォーマントの良し悪しにかかっているといっても過言ではない。地名調査の実施は、現地に臨んで実際の地形を見ながら情報を地図に記録していくことが望ましいが、広大な範囲にわたって、限られた日数でおこなう場合、空中写真を使うこともできる。現在、国土地理院から発行されているカラーの空中写真を使用し、インフォーマントから地名に関する情報を得て、それを5000分の1の国土基本図か、1万分の1地形図に記録していくのである。地名の分布状態に応じて、地図の縮尺を考えれば良いが、一般には大縮尺のものが良い。

筆者は、沖縄本島北部の太平洋岸に面する東村の海岸の前面に広がっている海域の小地名調査をおこなった時も、3名の海人（ウミンチュ＝漁師）に国土地理院発行のカラーの空中写真を見てもらいながら地名を言ってもらい、筆者が5000分の1の国土基本図に記録していく方法をとった。

4 地名調査の事例——東村の小地名

沖縄本島北部東村では、「東村史」全3巻の編集が進められており、1982年に第2巻資料編Ⅰが完成した。筆者も東村史づくりに関わった関係で、そのなかで担当した「福地川・新川川流域の小地名」と、第1巻の通史編に収録予定の「東村の海岸と海域の小地名」を事例として、地名調査の一端を記する。

1) 福地川流域の小地名

東村は沖縄本島北部の東海岸にある村で、伊湯岳（446 m）、玉辻岳（288 m）を主峰とする脊梁山地から開析された海成段丘の縁が、海岸に迫っているところが多い。海成段丘面を開析しながら流れる福地川は、東村の車村落と魚村落の中間付近に源を発し、伊湯岳から流れるいくつかの支流を集めて、平良港に注ぐ長さ12.1 km、流域面積36.0 km²にもおよぶ沖縄島最大の河川である。福地川流域を含むこのあたりは、近年まで交通不便な僻遠の地として知られていたが、このあたりにも、人々は居を構え、集落を形成し、わずかばかりの平地を耕したり、周囲の山々に仕事を求めて生活をたてていた。

現在、福地川の大部分は福地ダムの湖底に沈んでいるが、福地川と人々との関わりに起因して、福地川とその流域のところどころに小さな地名がつけられている。まさに、この小地名こそ、この川と人々の生活との歴史を物語る証であろう。

次頁の図（その1・2）は、「東村史」に収録してあるもので、福地川に沿ってつけられている小地名を記録した事例として再掲載した。

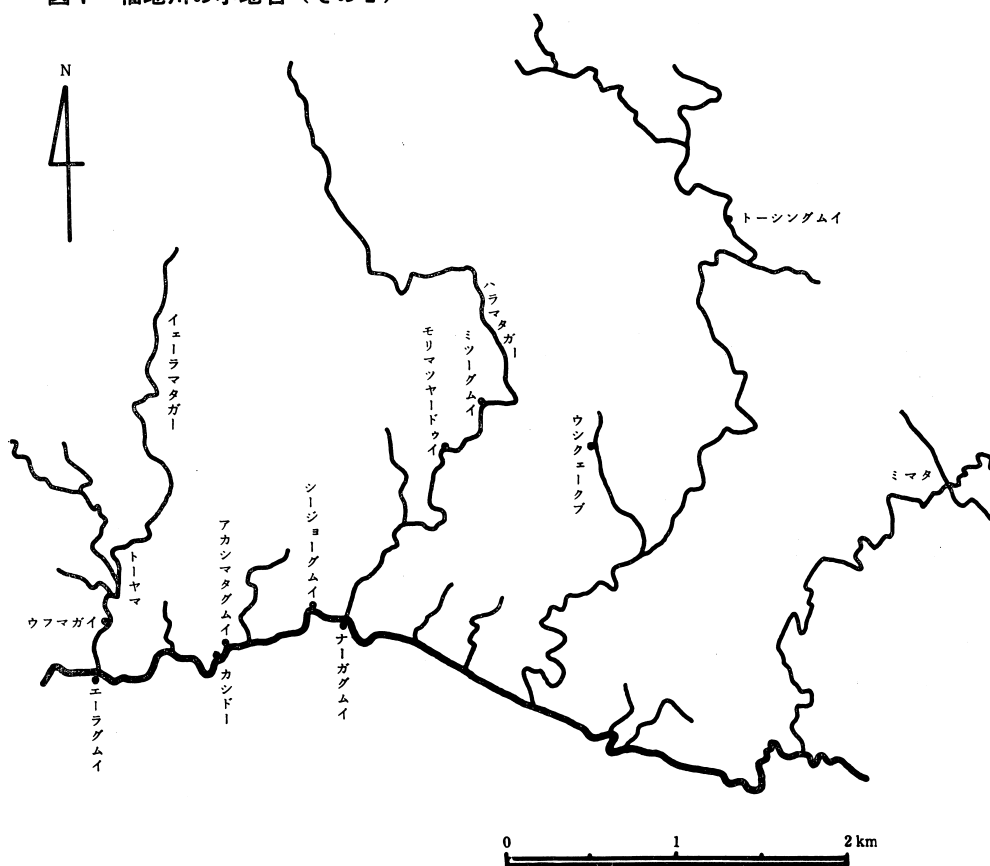
小地名のなかで多くみられるのは、「カラタキグミ」「イジュグーグミ」「トゥンジュグミ」など水のよどんでいる淵を意味する「クミ（小堀）」と、「シナグミジハイ」「ヤラヌミジハイ」「トゥンジュマガイミジハイ」など、水の早瀬を意味する「ミジハイ（水走）」地名である。福地川に沿って「クミ」地名は22箇所、「ミジハイ」地名は8箇所みられる。

小地名の分布を河口から上流まで概観してみると、当然ながら集落の発達している河に近づくにつれて、小地名の分布は密となり、人々と川との関わりが深かったことを示している。これらの地名の起源についても、歴史が浅いということもあって、ほとんどその起源を知ることができた。

その例を列記してみると、

- ① トーシグミ——唐船（トージン）が浮かべられるくらい深いクミであったことによる呼称。
- ② シーゾグミ——このクミの近くで、ティカチ（車輪梅）やムム（山モモ）の皮で染料を製造していたことによる呼称。
- ③ カチンジョーヌミジハイ——イノシシ垣の垣門があったことによる呼称。
- ④ ジョーグミ——このクミの淵には門（ジョー）に立てるヒンブンの形をした岩があり、7ひろの長さがあったことによる呼称。

図1 福地川の小地名（その2）



⑤ ウシクエークブ——谷間で牛を殺して食べたことからの呼称。

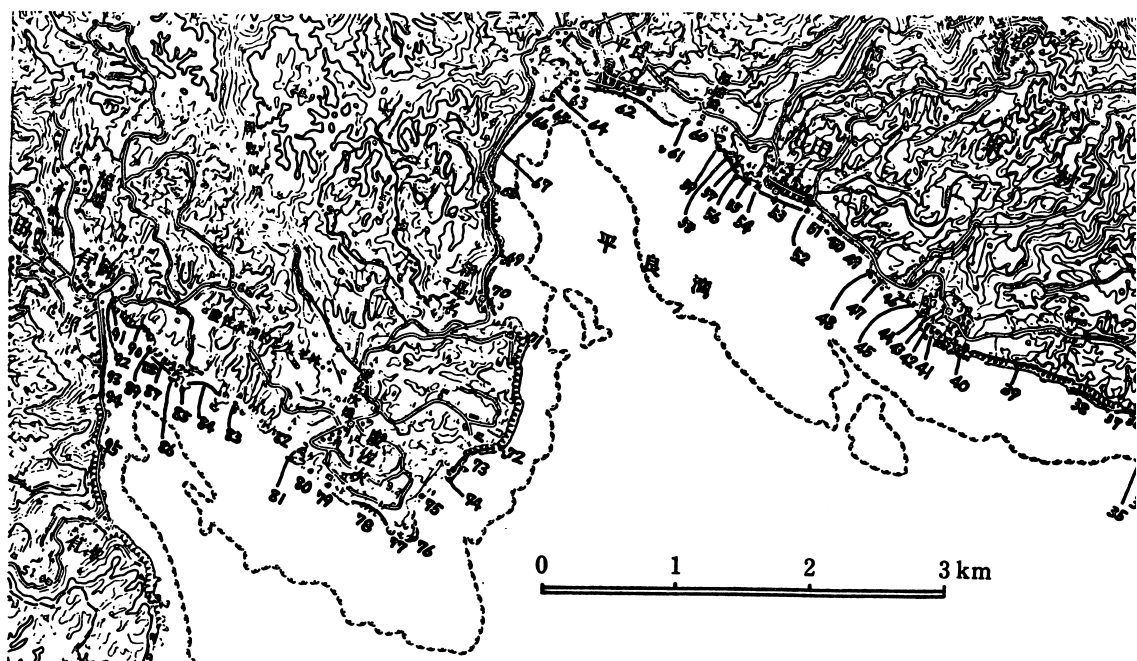
2) 海域の小地名

東村の海域にもサンゴ礁が発達している。沖合の白く線状に波打っている場所はヒシ（干瀬）と呼ばれ、干瀬と島との間の浅海域はイノーと呼ばれる。ヒシおよびイノーは、タコやサザエ・モズクなどの魚介類や海藻類の捕獲のみならず、サンゴ塊や干瀬の岩塊の採集など地域住民と深く関わってきた場所であり、陸地の延長と考えてもよい場所である。このように、人々の生活がある場所には、必然的に地名がつけられている。ここでは東村の海岸・イノー・ヒシにつけられている小地名について述べる。（図2・図3参照）。

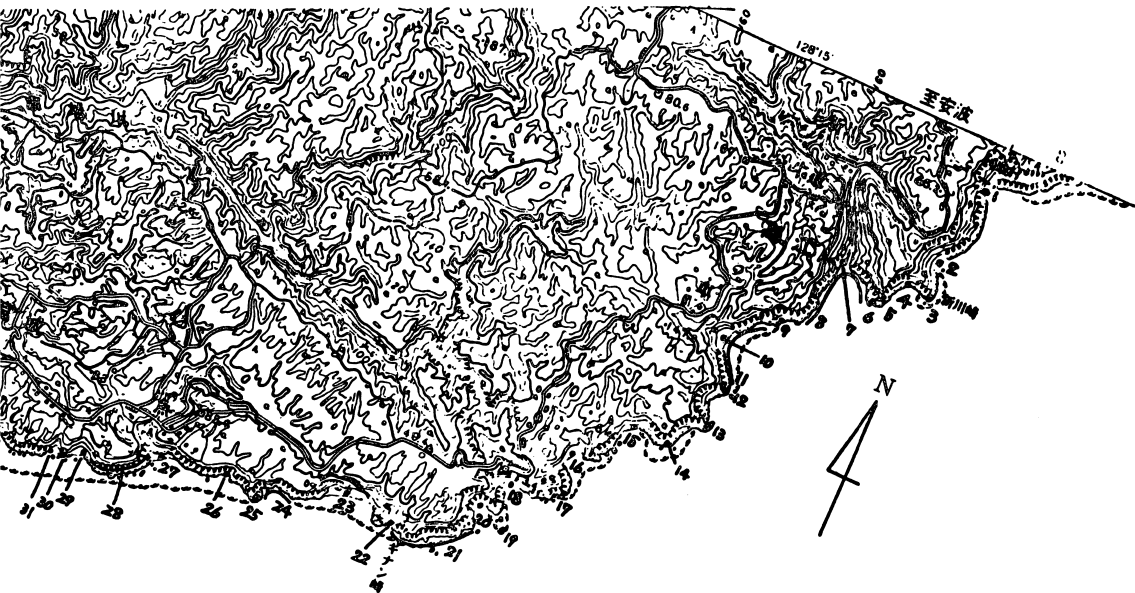
まず、東村の海岸部における地名の分布をみると、長さ約24kmの間に100近い小地名がつけられている。基本的には砂浜につく「ハマ」地名と岩の突出部につく「トッガイ」地名である。古い村落である平良・川田・宮城の付近では、地名分布は密となっており、人々との関わりが深いことを示している。

小地名の起源についても、基本的にはタケー（高江）バマ・ウフドゥマイ（大泊）バマのように、陸地の集落名や土地名をつけているが、下記の例のように、他の起源からつけられ

図2 東村の海岸部の小地名

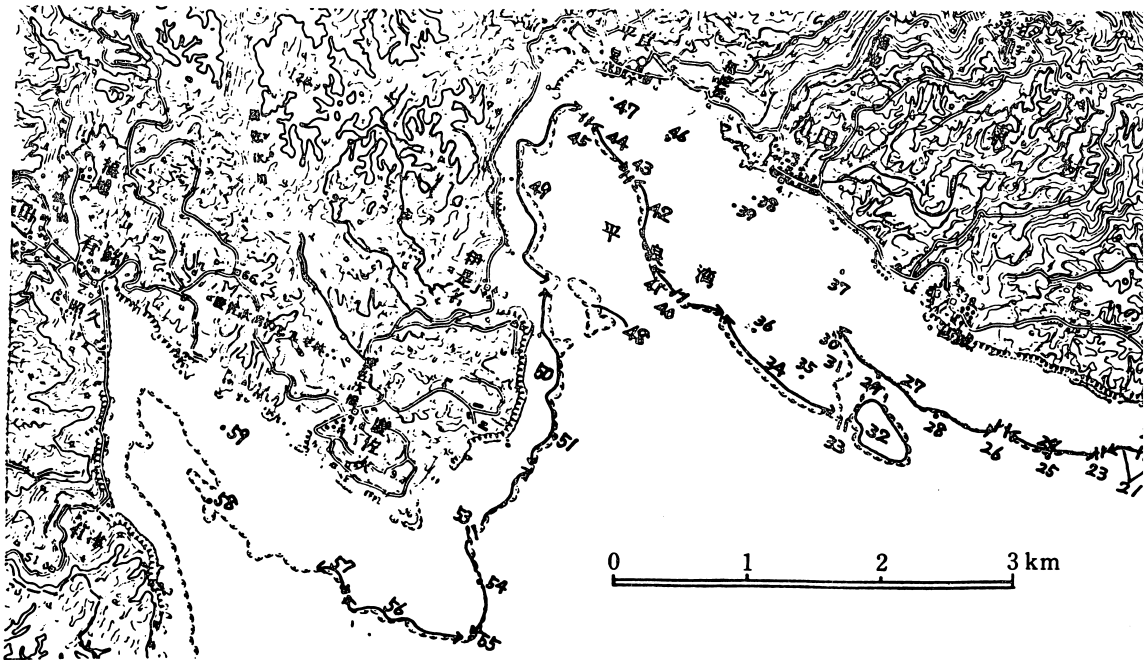


- | | | | | | |
|----|------------|----|-----------|----|----------|
| 81 | ウフバマ | 65 | ソーハミトゥガイ | 49 | タンヤキバマ |
| 82 | ミーザマ | 66 | タチゲー | 50 | チブハー |
| 83 | アカバマ | 67 | シンガーバマ | 51 | ウフムドル |
| 84 | スクバマ | 68 | ミハリ | 52 | フガッタテンプス |
| 85 | スクバマヌサキ | 69 | イジナートゥガイ | 53 | カータバマ |
| 86 | インタッチュ | 70 | イジナーバマ | 54 | サーンガーチビ |
| 87 | ゴンミチャー | 71 | トゥールンカー | 55 | アササキ |
| 88 | ヒジャー | 72 | ワタイグチスイシ | 56 | アカアササキ |
| 89 | ムムギヌサチ | 73 | マガラ | 57 | ウシウンビハマ |
| 90 | ヒジャーヌフニウカス | 74 | ギサントゥガイ | 58 | アジケーバマ |
| 91 | クワンシガマ | 75 | ウッバマ | 59 | アジケーマサキ |
| 92 | ウッカスチビー | 76 | アカガートゥガイ | 60 | ヌンガニクバマ |
| 93 | ビラクスシチャー | 77 | ティーマトゥイバマ | 61 | ンナトゥグチ |
| 94 | ビラクスカーンチビ | 78 | ウッカジ | 62 | テーラバマ |
| 95 | ヤマトガー | 79 | ユリバマ | 63 | ソーハミグチ |
| | | 80 | ビーチャ | 64 | ソーハミバマ |



- | | | |
|---------------|---------------|-------------|
| 33 トウジマサキトゥガイ | 17 ウフドゥマイトゥガイ | 1 タケーバマ |
| 34 トウジバマ | 18 インタ | 2 クバマヌハマ |
| 35 ンザトゥザキ | 19 フンタトゥガイ | 3 クバマザキ |
| 36 パーシトゥガイ | 20 フンタ | 4 ボージー |
| 37 パーシバマ | 21 ギナンザキ | 5 クヒシ |
| 38 イシブイバマ | 22 イシブイバマ | 6 アラカーザキ |
| 39 ナガハマ | 23 デークンマイバマ | 7 アラカーチビ |
| 40 フキハマ | 24 スーニンマガイ | 8 アラカーマガイ |
| 41 タジマガマ | 25 トゥールンカー | 9 アカミジー |
| 42 マーグシクバマ | 26 ミーパタキ | 10 クルマバマ |
| 43 スペランサキ | 27 イューバマ | 11 クルママガイ |
| 44 スペラバマ | 28 イュートゥガイ | 12 クルマトゥガイ |
| 45 フルジマバマ | 29 インマ | 13 ナングー |
| 46 フルジマトゥガイ | 30 インマトゥガイ | 14 メードゥマイザキ |
| 47 ユンヌガマ | 31 デークバマ | 15 メードゥマイバマ |
| 48 ウシハマラ | 32 イノーガマバマ | 16 ウフドゥマイバマ |

図3 東村海岸のイノー・ビシにつけられている小地名



- 46 テーラグルシ
- 47 メービングッ
- 48 タナガビシ
- 49 (名なし)
- 50 イジナービシ
- 51 カヨウグムイ
- 52 アカガービシ
- 53 アカナグチ
- 54 フニチキズ
- 55 アカガー
- 56 メービシ
- 57 ウッカジグチ
- 58 タカウリ
- 59 ハージ

- 31 ウンシナカビシ
- 32 ウンシビシ
- 33 ヘーングチ
- 34 メービシ
- 35 メービシウフグムイ
- 36 メービシサーグムイ
- 37 ワカウル
- 38 ウフグルシ
- 39 サバグルシ
- 40 ウナンギリグチ
- 41 ウナンギリ
- 42 サホイ
- 43 クルシグチ
- 44 ターラメービシ
- 45 テーラグチ



- 16 イューグチ
- 17 インマーグチ
- 18 インマービン
- 19 イノーガマビン
- 20 イノーガマグチ
- 21 トウンジビン
- 22 マガラグチ
- 23 ンザトゥグチ
- 24 ウフビン
- 25 ウフビングムイ
- 26 ヤシグチ
- 27 ミンサキビン
- 28 クワンシングムイ
- 29 ミンサキグムイ
- 30 ウンシグチ

- 1 タケーグチ
- 2 タケービン
- 3 クバマビン
- 4 ボーヂィ
- 5 クルマビン
- 6 クルマグチ
- 7 メードゥマイビン
- 8 メードゥマイグチ
- 9 ウフドゥマイビン
- 10 インタグチ
- 11 フンタグチ
- 12 デークンマイビン
- 13 デークンマイグチ
- 14 ミーパタキグチ
- 15 イュービン

た小地名も多くみられる。

- ① ウシウンビハマ——病気で死んだ牛馬を埋めた場所からの呼称。
- ② イシブイバマ——釣につかう石がとれることからの呼称。

また、海域において、漁場の位置を知るために使われる方法として、アティムンと呼ばれる「山あて」があるが、その目印として山頂や海岸部の岩の突出端が選ばれる。たとえば、イジナーウフクンジは山あてに使われる代表的な場所である。

つぎに、イノーおよびヒシの小地名についてみよう。

東村の海岸の前面に広がっているイノーおよびヒシには約60の小地名がつけられている。小地名がつけられているところをみると、ヒシおよびヒシの切れ目、イノーおよびヒシのなにかにある窪み、水面上にあらわれている岩などがおもなものである。ヒシ名は対海岸および陸地の地名、とくに村落名に対応してつけられているものが多い。

たとえば、

- ① タケービシ——高江（タケー）村落
- ② イュービシ——魚（イュー）村落
- ③ ターラメービシ——平良（ターラ）村落

各々のヒシには切れ目があり、この切れ目をクチと称し、それぞれにクチ名がつけられている。クチはサバニなどの船がヒシを横ぎる通路であり、水路の役目を果すところである。イノーやヒシにはクムイと称される窪みがあり、これらのクムイにもクムイ名がつけられている。

また、ヒシの外には、スニ（曾根）と呼ばれる魚の多く集まる海底の高まった場所がある。タケーズニ・ウフドゥマイズニなど9箇所あり、アカマチ・シロマチなどのマチ釣りがおこなわれている。このような漁場にもスニ名がつけられて、「山あて」によって位置を定めて、漁をおこなっている。

5 むすびにかえて

都市化・農地の基盤整備・海岸の埋立など急激な社会環境の変化に加えて、土地の事情に明るかった人々が激減し、祖先から受けついできた地名、とりわけ小地名が消失していきつつある。地名は生きた文化財といわれるように、長い間人々と関わってきたものである。

地名を記録し保存していくことは、地域住民の責務である。近年、沖縄における地域史（誌）の編集のなかで、是非地名をとりあげて後世に伝えていただきたい。

参考文献

- 山口恵一郎（1977）：『地名を考える』，日本放送出版協会。
- 東村史編集委員会（1982）：『東村史』第2巻資料編Ⅰ，東村。
- 堂前亮平（1982）：沖縄島北部海岸における礁原・礁池の小地名，日本地理学会予稿集21
- 南島地名研究センター（1983）：『南島の地名』第1集，新星図書出版。